はるか松虫草

かり の名ざい な高さい

そゆな

と吹かれたりに客雪

望郷の

母とで

露けさの茶

稿

弓道部の思い出

私が藤枝東高等学校に入学したのは昭和 34年4月でした。高校入学をきっかけにし て何か新しいことに取組みたいと思ってい た。私が選んだ部活動は弓道だった。私の 家の近くに矢場があり、小さい時から見慣 れていたことと私の祖父も弓を引いたこと があって親近感があったからだと思う。

弓道部は創部間もない歴史のない部で、弓 道場は校舎の一番奥の柔道場と古い校舎を 利用した図書館に挟まれた所にあり、射小屋 (弓を引く所) はトタン屋根で床を張った粗 末なものであり、使用のない時や雨降りの 時には通路にもなる所であった。(後に戸も つけられ弓道場らしくなった)

新入生は初めは素引き(矢をつがえずに 弓を引く)から始まり巻藁で射型をつくり、 夏休みに入る前頃からようやく的を射るこ とができた。的に向かうようになりようや く面白味もでてきた。

私達に弓道を指導してくださっていたの は岡部町内谷在住の蒔田隆之助先生範士八 段でした。時折、放課後の部活動が終わって から希望者で国道一号線を弓を担いで4キ 口も離れた蒔田先生の所まで指導を受けに 通いました。当時は一号線も車の通行は少 なく、今の車社会ではとても考えられない ことでした。

その後、夜間岡部まで通うのは危険とい うことで、蒔田先生や弟子の大橋清史先生 錬士六段が学校に来てくださるようになり 先生の指導は単に弓を引くことだけでは

なく、弓道の精神の根本まで指導してくだ さり、当時の県内にあっては一目置かれて いた存在であった。

私達の頃の弓道部の戦績で記憶に残って いるものは、一年の時県大会で準優勝し岐阜

での東海四県大会に出場。翌年は静岡が会 場ということで三校出場できることになり、 何とか三位になり二年連続の東海四県大会 に出場できたことでした。その時の練習で は、照明設備のない道場でしたので、自転 車を並べて的を照らしながらやったことが とても印象に残っております。今でも忘れ られない思い出です。

同 窓 会 報

その後、道場は校内の現在の場所に新築移 転され、他校にも引けをとらない立派なもの となり、後輩達の努力で全国大会にも出場 できるようになり、我部出身者が大学弓道 部でも活躍し、立派な指導者として多数育っ ております。我校弓道部は弓道の精神を大切 にすることに徹し、スポーツとしての弓道、 武道としての弓道の精神が伝統として脈々 と受け継がれております。





藤枝東高音楽部発足所感

「人生は何も成さずにいるには余りにも長 過ぎ何か成就するには余りにも短すぎる」 とは誰の言葉だったでしょうか。昭和 30 年夢一杯の希望を持って藤枝東高に入学し ました。当時東高にはサッカーと勉学以外 は重要視されない風潮があり雨天体育館の 片隅に音の欠けたピアノが1台あるのみで 雨天ともなればバレーボールやバスケット ボールが飛び交い音楽部員も無だったよう に思います。

昭和 32 年静岡国体が予定され、東高グ ランドはサッカーのメインスタジアムにな り、チームも優勝を期待され市民挙げての 熱狂に包まれることになりました。

そして母校の為に校歌と応援歌を高らか に吹奏したい、そんな思いが志を同じくす る同級生と後輩の必死の東奔西走で吹奏楽 部創立が実現いたしました。然し「楽器が 調達出来ない」と途方にくれていると「パ



しよう」と当時の生徒会長神谷氏が救いの 手をさし述べてくれました。利益を見込ん で楽器は購入出来ましたが、その後のパン 屋の運命については定かではありません。 神谷氏と学校側の御配慮に深甚の敬意を表 します。

又、財政的な無心をお願いした藤枝市教 育委員会様にも「楽器の貸与」という格別 な御配慮を決定され、心底より感謝申し上 げる次第でございます。

32 年 4 月新入生を迎えて連日嵐の様な特 訓が続きました。唇を腫し、目を真っ赤にし、 合宿までしてやっと開会式に演奏が間に合 いました。

そしてサッカーの試合も東高が優勝し、 市中パレードも立派に出来、錦上花を添え る事が出来ました。当時の部員の皆様に深々 低頭してお礼とねぎらいの言葉を申し上げ なければなりません。

昨年、音楽部創立 50 周年記念会が催さ

れ、一つの目標に向かっ て苦楽を共にした旧知の 人達とお逢い出来、胸が して音楽を専攻された方 など様々でございますが、 人生の糧として今後も大 いに音楽を楽しんで頂け

れば幸甚と存じます。 終わりに東高音楽部の 更なる発展と御関係の 皆々様のご清勝をご祈念 申し上げ、音楽部創設の **感想の一端といたします。**









の代表を経て二〇〇二年和 務を経て二〇〇二年和 のでした。 フルクに赴任し、大統 れい、その壮麗な姿を た。ペテルブルクは建都三〇八 た。ペテルブルクは建都三〇八 た。ペテルブルクは建都三〇八 た。ペテルブルクは建都三〇八 た。ペテルブルクへの た。ペテルブルクへの た。ペテルブルクへの を超える日本文化の公 た。ペテルブルクへの と間の折、最初の詩に た私に会いたいと大な たると思って招待し、大統 たると思って招待。 いるとの連絡を受け、 になると思って招待。 いるとの連絡を受け、 があります。 があります。 対一の来な舎がアの

本総領 本総領 本総領 本総領 本総領 本総領

第82回(2008年) 国展 『しなやかに』









く 咤そけつ 先か云のの度先し版云いと長っ私さのでの版生。わ真真々生で画わた号はあ てはれおはこ画の創れ似似顔はあをれる。 続しれがのけて

こともあるが、そこから逃げこともあるが、そこから逃げつもりでいる。木版画である。 具は墨だけである。本版画である。 場にはを中心に考えているが、 る。紙は手漉きの楮紙である。 を会員でもある。時間県ではない美しさいる。この国合いは重要になる。 に興味を示す人がいる。国画会は絵いる。この国画会もまた、私をしてくれる一つと云えよう。 を歩んでいるが、同志としてきりアトリエも別々である。時々皮に興味を示す人がいる。時々皮に関末を事が、に同なとの先いるが、二人は作風もりアトリエも別々である。時の方に要がある。藤枝静男は明治四十一たる。人を惹きつける語り口ところでいま、小説家藤枝静男は明治四十一たる。人を惹きつける語り口とでとへの藤枝静男にである。本位自の一次を表して表がある。その作品の到になる。人を惹きつける語り口とに表がある。と、本版画である。独自なおいまである。を表がある。を表がある。を表が、こ人は作風もりアトリエも別々である。時々とである。から、ころでいま、小説家藤枝静男は明治四十一た。本様神男は明治四十一た。本様神男は明治四十一た。本様神男は明治四十一た。本様神男は明治四十一た。人を惹きつける語り口といるが、同志として妻を歩んでいるが、同志としてきりたいまが、同志としてきりないまが、ころにはないまが、ころは、本版画である。との作品の到立とに、本版画である。本版画である。 私にはたまらなく面白い。

、身の老いを詠んだ作品が多 一句は句集の冒頭においたも 素は、六十歳の還暦と共に人 きな節目です。よくぞここま てきたものと思う。鶯の声を ひる心を詠っています。 して、草津の国立療養所要生 して、草木が太平洋戦争になっため中 がました。化石の俳号はその がするいます。 村越 化石 (12回)

第22号

お、受れ、受力を で の 五 の 五 に 句 集 に 句 集 年は栄回

山眠り火種のごら 荷島や山に居てぬ がの遺墨掛けて必

ことく妻が居り としょりいらめ

ねたき朧月

よ春の

0)

(昭和二十

「濱」に

かの見えてみとうなる人の見えてみる

夢くけけけ

かりれり

来の花と が前とわび 上の立ち

か春

せ虹龍のか

りのの道が あか

池谷 健 (40回)

心らはが にた誰杖 灯まもゆ しるらせて

選にいい、

忍

龍 雨 表 葉 啓 整 や 下 下 落 葉 踏 半 』

涙母いかか も横坐り おたたかく声物として寒の れ小さく祝ひ時へ寒の畳に坐り作句が来るし

校の草

ます。 6す。 1

ーパでタ三カー 分のから かれた かなた しせりィニはち

例とうした。

恒は歯た

製を神 なったなった ものと

湯豆腐に命会ひて安し

儲りの

命

凧揚げのはな 正座して心に 0 、のづ身を反立へ道の伸びてを八十八夜から 子み のひりて会



俳め

っ市のはま国 っ大な正く小サ 変る平も川ッ意な君失国カ 義どがっ夫し 深、初た、選

0) い今のも千手

は年年東の野権

らえ周のかるま枝ッぶ駅高

現場から

秋原 恭大 (38回)

えたは興か通あをレ 全販イーのなりる。開けたた 宝国のでは同級生た では同級生た が掛かり、思 がかり、思 がかり、 まながらいらいが ががらいらい ががらいらい ががらいらい ががらいらい では に で は に が か の 大 群衆で い の と で は に な が か い の 大 群衆で い の と で は に な が か い の 大 群衆で い の と で は に な が か い の 大 群衆で い の と で は に な が か い の 大 群衆で い の と で は に な が か い の 大 群衆で い の と い で は に な が か い の 大 群衆で い の と い で は に な が か い の 大 群衆で い の と い の

からも注文が 地元紙に掲 いるラサ

しをるンが部たいるき情々的て目。ス進、北がメ店報なに

えれ部へ歴が一活 れ己て地た文あ岐業ン使開 ら現み的しの。亘、のて事 のでは、 のでは、 のでは、 のでは、 のでは、 でのでは、 でのでは、 でのでは、 でのでは、 でのでは、 でのでは、 でのでは、 でのでは、 でのでは、 でいるでは、 でいるでは、

動商ま面よ議認性そ売僅 立駅受図の 来務と が様々 が様々 が、市

子役かきい重東謝。ら出場さわ欲もをととにがあつ人の をに故、時い京のでれ稼でんれし良見でしは、るで間人 育立郷力期こを気もて者労のないいつすて寄東息す関間 育てて欲しい、と思う 育てて欲しい、と思う 育てて欲しい、と思う 育でて欲しい、と思う かに戻り、故郷を抱いて がら東京の病院で働いのですが、東京人に ながら東京の病院で働いのですが、東京人に ながら東京の病院で働いのですが、東京人に ながら東京の病院で働いってすが、東京人に を故郷にすることは東京人に ながら東京の病院で働いってすが、東京人に ながら東京の病院で働いってす。 をは郷にすることは東京人に な郷に戻り、故郷を抱いて をとなのです。私とし ととながら、故郷を抱いて を対しい、そ

あ高だら級事大験した 緒づがい毎開四 国もしい。技学面挨り、校か選会ののしま学 にくりも回い人 立会たな私場年白拶

のりのし都てはるてな人の地く文てと分大まにら いき地

はらびは付同てし年、育故ワの十てで、にえがいもにでくがな

لح

